

木の技法と表現

－ 寄せ木と埋め木の題材 －

河野 令二

The Technique and Expression in Wood Work

KOUNO Reiji
(Received January 15, 2009)

キーワード：寄せ木、埋め木、題材

はじめに

木は、種類ごとに固有の色と木目を持っている。木の外観的な特徴は、自然の表情であり、木目・木理は、年輪によって現れる模様である。これは、他の自然材料にない特徴であり、木のものに独特の表情を持たせている。

木の技法には、裂く、割る、引っ掻く、切る、削る、挽く、穴をあける、彫る、曲げる、ひねる、付ける、寄せる、埋める、組む、編む、留める、繋ぐ、描く、染める、着色する、塗るなどがある。これらの技法は、木でもものをつくる学習のなかで、知らされ、試され、発見され…獲得される。

木でもものをつくる学習は、ものの機能や生活や環境の関わりを考え、様々な技法や道具を使い、形を創造していく。そして、木の特徴である色や木目を生かすことで、変化に富んだ様々な造形を展開していく。

ここでは、木の技法である寄せ木と埋め木を用いた学習について、題材を中心に報告する。既に学習を終えた授業作品だけでなく、今後の学習のための題材を含めて報告する。

1. 寄せ木と埋め木

1-1 寄せ木について

木は、独特の色と木目を持ち、同一種の木であっても微妙な違いがある。製材によって板目、柾目といった異なった木目を得ることができる。木を寄せる(接着する)ことで、木の持っている木目や色の対比の生かした造形的な変化をつくり出せる。異なる種類の木を寄せるだけでなく、同一の木の木目の配列を変えたり、異なる幅の材料による配列を工夫することで、造形の可能性を広げることができる。

寄せ木は、接着剤を使い、接着する面どうしを均一な平面にし、はたがねやクランプなどで固定

して、圧着する必要がある。

1-2 埋め木について

木に、凹部をつくり、そこに材料を埋めることで、寄せ木と同じように、様々な造形の変化をつくり出せる。凹部のつくり方は、角鑿盤や鑿で彫る、ドリルで穴をあける、鋸で溝をつくるなどの方法がある。異なる木を埋めることや複雑なかたちの埋めることもできる。象嵌のように木以外の材料を生めることでさらに多様な造形が可能である。

寄せ木、埋め木に関しては、できるだけ木の素材の色を生かすため、仕上げは、透明塗装やオイル塗装およびワックス仕上げをしている。塗装の前の素地は、サンドペーパー80番、150番、240番をかけ仕上げている。

2. 寄せ木の題材

2-1 寄せ木の器

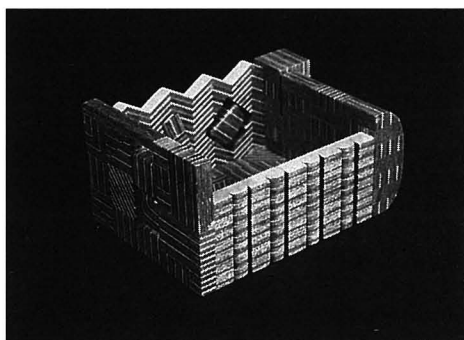


図 1

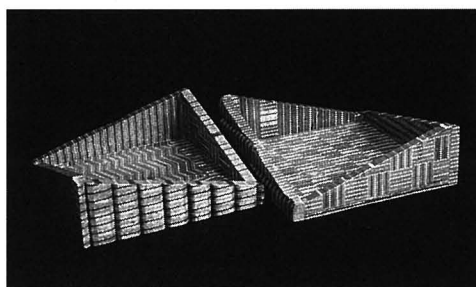


図 2

図1, 2は、厚さ12mmのシナ合板を寄せている。20mm幅に製材した材料を板状に積層し、底部や側部に様々な変化を持たせて仕上げている。同一の材料であるが、合板によるストライプを生かし、計画的に制作していくことが重要である。ラワン合板の積層とは異なり、シナ合板による積層は、合板の表面部のシナ材の白い部分と、ラワン材の赤い部分による縞模様を得ることができる。

仕上げは、クリアラッカー塗装である。



図 3

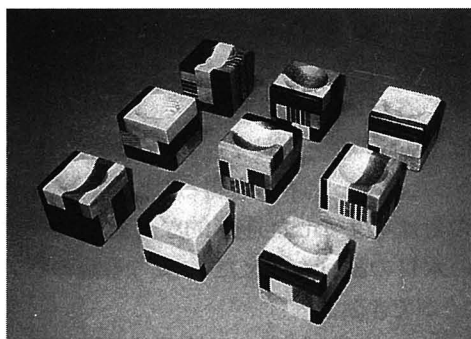


図 4

図3、4は、黒檀、楢、ぶなを使っている。

図3は、濃い色と薄い色を交互に寄せ、明快なストライプをつくっている。

図4は、さらに、シナ合板を寄せている。6cmの立方体の構成であり、皿状に凹部を削っている。同様の木の組み合わせで、上部をどこにするかで変化をつくり出している。

仕上げは、オイル塗装である。



図5



図6

図5、6は、桂、杉、朴を主に使っている。25mm幅に製材した材料を寄せて板状にしたものを基本にし、そこから、いくつかの操作を繰り返し、かたちをつくっていく。

図5は、二層に重ねることで比較的大きな皿をつくっている。皿の底部は、円形にくり貫き、そこに、別の構成をした形を埋め込んでいる。シンプルな形の中に、変化をつくり出している。

図6は、4層重ねることで、重厚な塊をつくっている。

仕上げは、オイル塗装である。

2-2 寄木のペーパーウエイト (1)

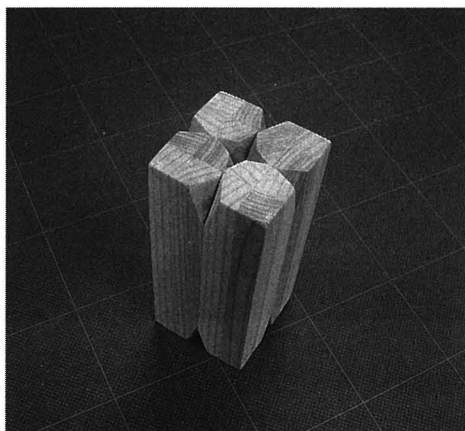


図7

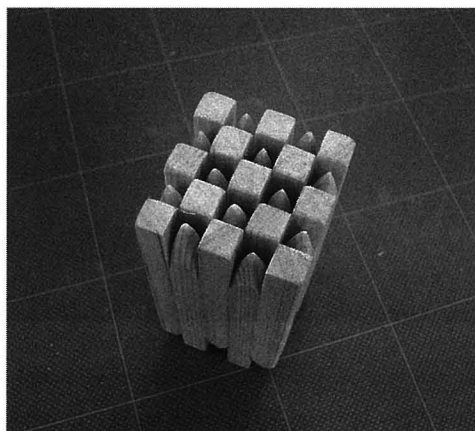


図8

図7、8は桧を使っている。角材 10mm×10mm×150mm を単位にし、角材の両端の木口の削り方と構成を工夫する。内部に釣り用の鉛の錘を入れることで、重さを加えている。

図7は、4本を寄せたものを、さらに単位にして、力強い構成をしている。

図8は、5×5本の構成である。削らないままのかたちととがった形の対比でまとめている。

仕上げは、オイル塗装である。

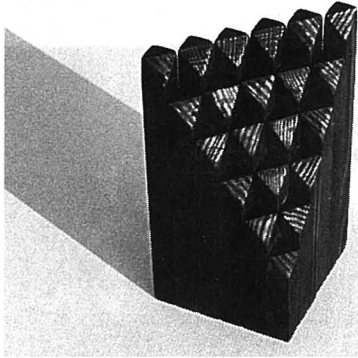


図 9

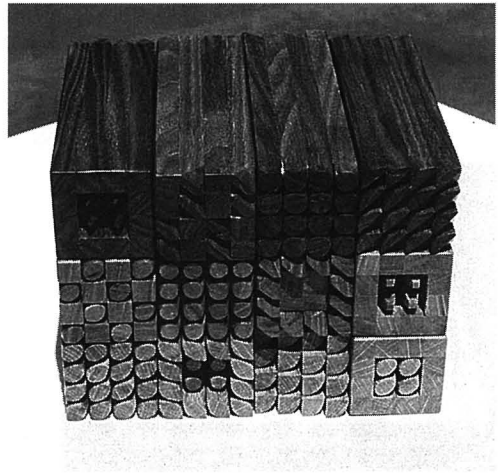


図 10

図 9 は、10mm×10 mm角の檜の角材使っている。同様の削り方で、長さを変え、グラデーショのある構成をしている。仕上げはオイルステイン仕上げで、木目を残し、濃い色に着色している。

図 10 は、ぶな、檜、樺、胡桃などを使っている。様々な木口の削り方による構成を見ることができる。

仕上げは、オイル塗装である。

2-3 寄木のペーパーウエイト (2)

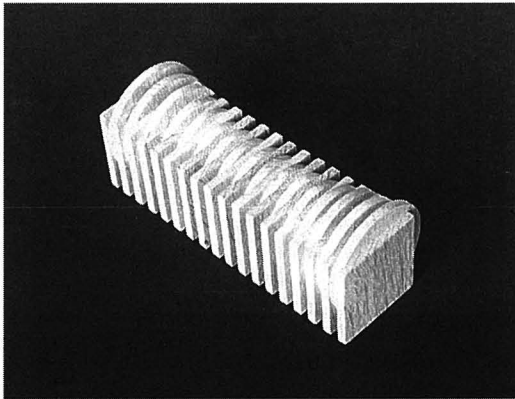


図 11

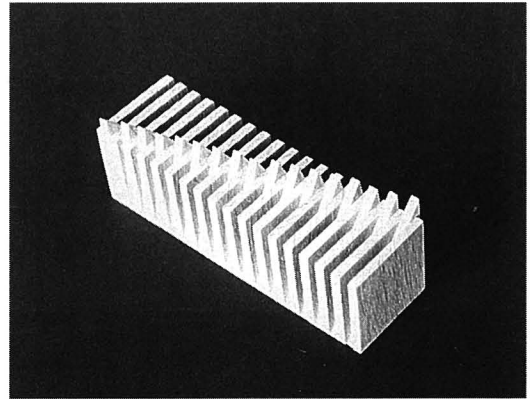


図 12

形のグラデーションや規則的なずれなどによる板材を重ねる構成である。

図 11 は、正方形と円を、図 12 は、正方形と三角形を使っている。ここでは、規則性を重視した造形づくり出しているが、有機的なかたちの重なりや、不規則な組み合わせによる構成を試みるのもよい。内部に釣り用の鉛の錘を入れることで、重さを加えている。

仕上げは、塗装をせず、素地仕上げである。

2-4 寄せ木のペーパーウェイト (3)

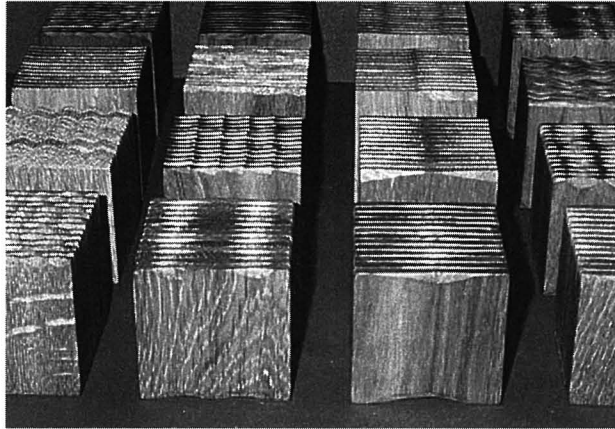


図 13

檜、クルミ、ふなを使っている。同種類の木を積層している。
厚さ 3 mm、一辺 6cmの正方形の板材を単位にし、その両端を小刀で削り、16枚はり合せている。
一枚一枚の削り方と重ね方を工夫することで、造形の変化をつくり出している。内部に釣り用の鉛の錘を入れることで、重さを加えている。
仕上げは、オイル塗装である。

2-5 寄せ木の時計

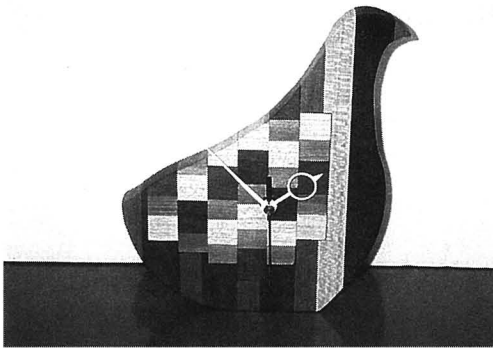


図 14

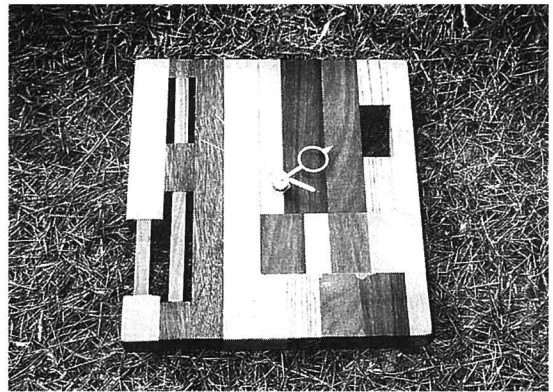


図 15

檜、桂、ラワン、ラミンなどを使っている。異なる木の配列を考え、時計の文字盤をつくり出している。

図 14 は、細かな木の配列と、長い木の配列を組み合わせている。

図 15 は、縦方向の木目を生かし、左側に空間を使った配列を試みている。

仕上げは、オイル塗装である。

2-6 寄せ木のトンボ・はち

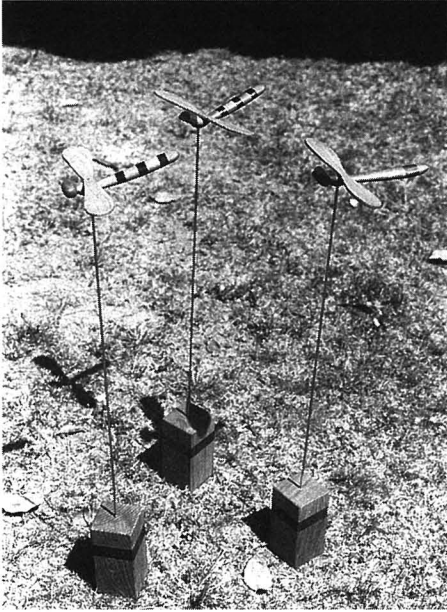


図 16

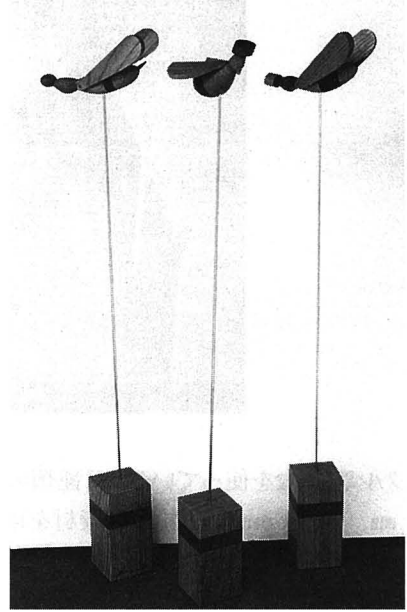


図 17

図 16, 17 は、檜、黒檀、チークを使っている。
昆虫の腹部に色の異なる木を寄せている。金属の棒を差し込む台も木を寄せている。
仕上げは、オイル塗装である。
寄せ木は、様々な昆虫、鳥、魚、動物を造形の対象にできる。

3. 埋め木の題材

3-1 埋め木のペーパーウエイト (1)

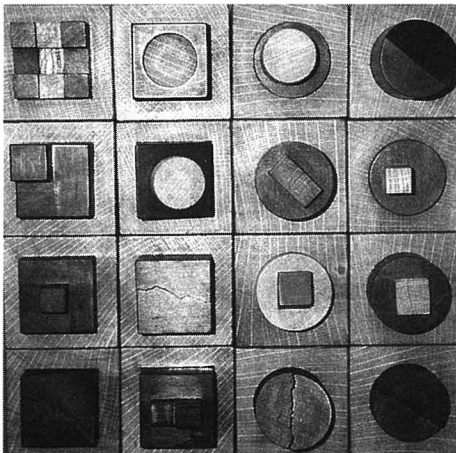


図 18

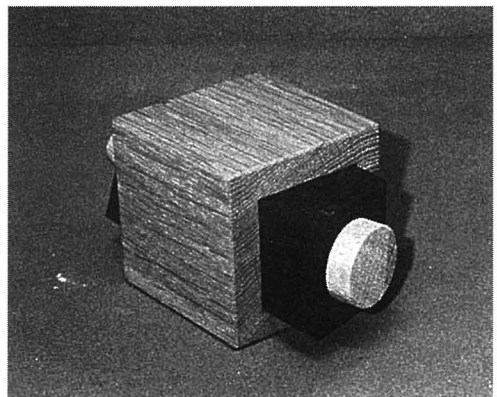


図 19

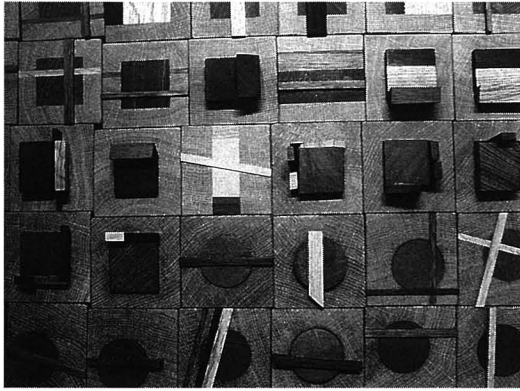


図 20

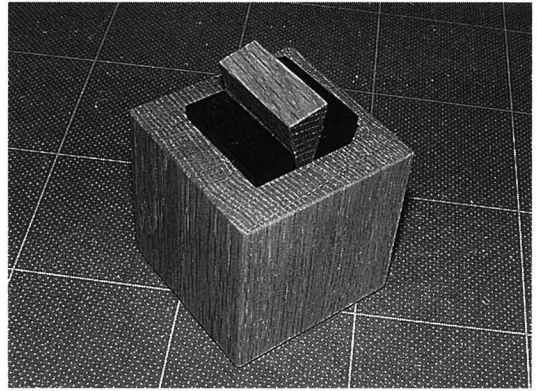


図 21

図 18, 19, 20, 21 は、榿、桜、欖、花梨、黒檀、紫檀、チーク、樺、タモなどを使っている。一辺が 55 mm の立方体に穴をあけ、そこに様々な形の木を埋めている。

図 18, 19 は、上部と底部に穴をあけ、両面から木を埋めている。

仕上げは、オイル塗装である。

図 20, 21 は、上部だけに穴を開け、木を埋めていく。さらに、薄い板や細い板を埋めているものもある。それぞれの内部に釣り用の鉛の錘を入れることで、重さを加えている。

仕上げは、ワックス仕上げである。

3-2 埋め木のペーパーウェイト (2)

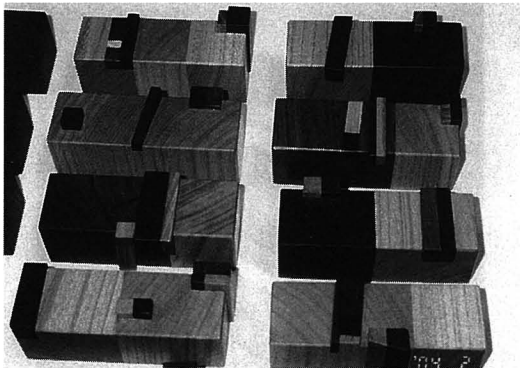


図 22

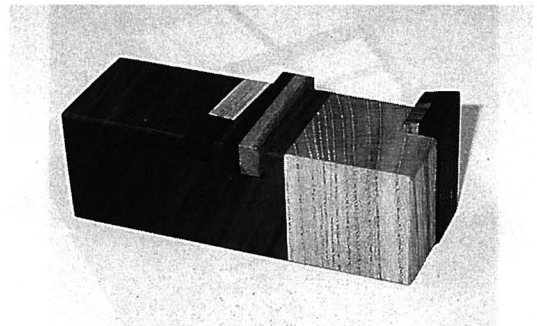


図 23

榿、桜、欖、花梨、黒檀、紫檀、チーク、タモなどを使っている。

本体は、同種の木の方向を変えて寄せたり、異なる木を寄せている。鋸盤で溝をつくり、線状の木を埋めていく。また、角鑿盤で穴をあけ、そこに木を埋めている。

内部に釣り用の鉛の錘を入れることで、重さを加えている。

仕上げは、オイル塗装である。

3-3 埋め木の皿

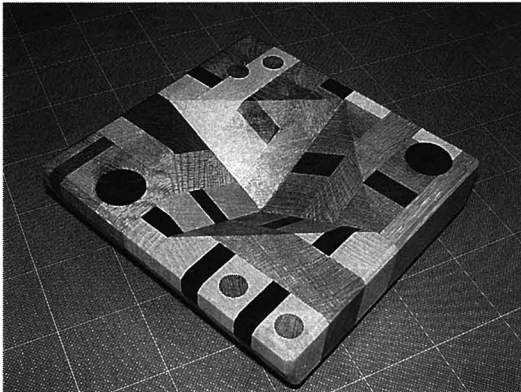


図 24

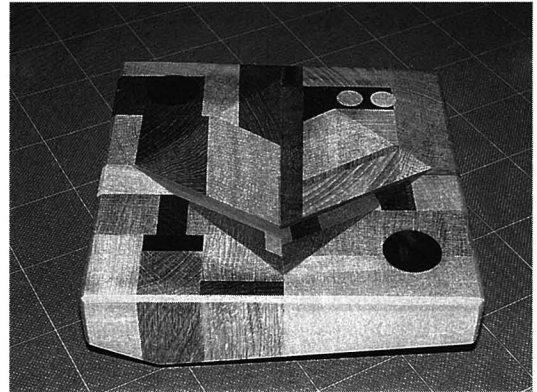


図 25

図 24、25 は、楡、桜、樺、タガヤサン、花梨、黒檀、チーク、檜を使っている。

寄せた直方体を単位にし、皿の凹部になるように斜めに削り、それを四つ寄せ、さらにそこに角状や円柱状の木を埋めている。外形をその後削っている。

仕上げはワックス仕上げである。

3-4 埋め木の箱

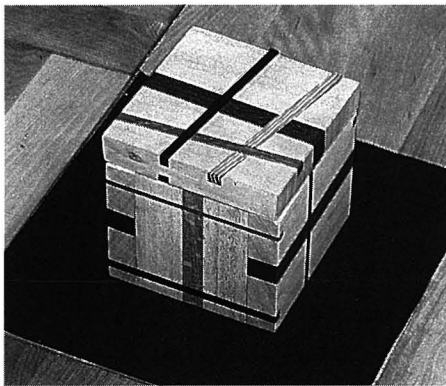


図 26

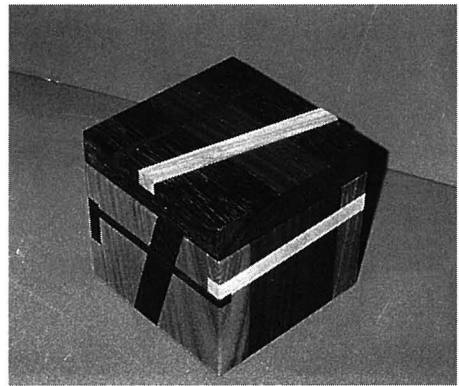


図 27

桐、楡、桜、樺、タガヤサン、花梨、黒檀、紫檀、チーク、タモなどを使っている。

箱の内部とふたを含めすべての面に木を生めることが可能である。一面ずつ必要に応じて寄せ木、埋め木をしたものを箱状に組み。さらに、木の方向や幅や深さを考え、木を埋めていく。

図26は、桐の木を主用材にし、異なる木を埋めている。

仕上げは、ワックス仕上げである。

図27は、樺、タガヤサンを箱の主用材にし、そこに異なる木を埋めている。

仕上げは、オイル塗装である。

4. おわりに

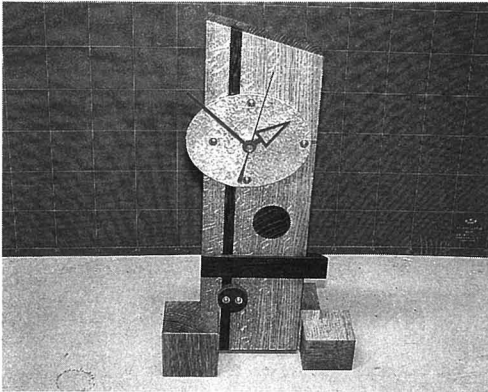


図 28

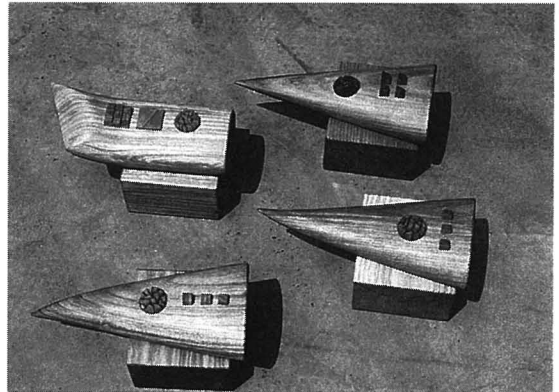


図 29

図28は、非対称な造形を試みた時計である。形の特徴として、幾何学的で、直線的な造形に終始している。それは、角鑿盤、鋸盤、ボール盤といった使う機械や道具によることが起因している。埋め木の場合は、あけた凹部に、有機的な形や裂いたり、割った木を埋め込むことが可能であり、図29は、割った木を埋め込んだ造形である。

木でつくる学習は、製材から仕上げまでの段階で、多くの技法が必要である。ここに報告した題材は、造形の可能性をある程度示している。しかし、つくるための道具や機械といった技術的なことが、発想を狭めていることも確かである。また、ここでの題材の多くは、寄せる、埋めるという技法だけでなく、いくつかの操作を繰り返すために、計画的につくることが望まれる。計画の始めやその途中で、失敗を含めた試行錯誤の段階を取り入れたことで、木をさらに生かした造形の幅を広げていける。

つくるための題材は、つくる楽しさや多様なかたちが発想できる可能性や自由度を持っていることが望ましい。寄せ木や埋め木は、大きな造形の一部に装飾的に用いることができ、額縁や家具や様々な木の造形との組み合わせが可能である。さらに、伸びやかで、幅と深まりのある題材を求めていきたい。

註

図1、2、3、4は、山形大学教育学部一授業（工芸B）の学生作品。

図5、6は、山口大学教育学部一授業（工芸AⅡ）の学生作品。

図7、8、9は、山口大学教育学部一授業（デザインⅡ）の学生作品。

図14、15は、山口大学教育学部一授業（工芸AⅡ）の学生作品。

図26は、山口大学教育学部一卒業研究の学生作品。

上記以外は、筆者の制作。